

妊婦・女性のみなさん、麻疹（はしか）に 気をつけてください。

愛知県産婦人科医会

平成 28 年 10 月号

平成 28 年 8 月下旬より、麻疹（はしか）の集団感染が関西地方や関東地方を中心に報告され、今後の拡大が心配されています。そもそも日本では、平成 27 年までの 3 年間に国内由来の麻疹患者の発症がなく、平成 27 年 3 月に WHO から麻疹の排除状態であることが認定されていました。しかし、今回は海外の麻疹流行地で感染した渡航者から感染が拡大したと考えられます。またその感染力はウイルスの中でも最強と言われ、免疫のない人は感染者と同室にいただけで 90%以上感染すると考えられています。ワクチン定期接種の普及により、2014 年の調査では、抗体保有率（免疫のある方）は 95%以上でしたが、感染予防に不十分な状態の方（抗体価の低い人）が少なからず存在しています。またワクチン接種後 10 年ほどで徐々にその効果が低下することが知られています。近年においては、麻疹の自然流行が少ないために、免疫力の増強効果も得られないため注意が必要です。



☆妊娠中の麻疹（はしか）感染は危険です。

麻疹においては、先天奇形との明らかな関連性はないとされています。しかし、妊婦が麻疹に感染した場合は重症化する可能性が高く、高率に流産や早産を発症します。さらに、感染のタイミングによっては、生まれた赤ちゃんに先天麻疹や新生児麻疹が発症することもあります。最大の防御であるワクチン接種は妊娠中にはできません。したがって免疫のない妊娠中の人は、日ごろからの手洗いやうがいだけでなく、麻疹の流行地であることが確認された場合は外出を控える必要があります。感染者、またその疑いのある人や流行地へ出かけた人との接触も避けるべきです。免疫のな

1.麻疹（はしか）とは？

麻疹ウイルスによる感染症で、空気感染、飛沫感染、接触感染の経路でヒトからヒトに感染します。その感染力は強力で、感染した場合は約 10 日間の潜伏期の後で、38 度前後の発熱、咳、鼻水などの風邪症状、結膜炎症状が次第に増強します。その後、口腔内に白色小斑点（コプリック斑）が出現しますが、急速に消失します。そして発疹期に入ると、耳の後ろや首、額から鮮やかな赤色の発疹が見られ、次第に顔、体、手足と全身に広がってゆきます。その後発疹は不整形となり、暗赤色となって徐々に退色します。回復期になると発疹の出現から 3～4 日続いた発熱も徐々に下がり、症状の回復が見られます。中耳炎、肺炎、脳炎や心筋炎などを合併する場合があります。診断は、臨床症状と血液抗体検査、地方衛生研究所で実施するウイルス遺伝子検査によって行われます。治療方法に特効薬はなく、対処療法が中心となります。

い妊婦が感染者と接触してしまった場合は、6 日以内（72 時間以内が効果的）に免疫グロブリンを注射することが推奨されています。発症した場合の特効薬はありませんので、症状に合わせた治療を行いながら慎重に経過観察する必要があります。これから妊娠を予定している人は、次項の「ワクチンを受けるべき人は？」を参考にして、該当する場合は早急に医療機関にご相談のうえ、ワクチンを接種すべきです。そして、接種後の2か月間程度は避妊してください。



☆麻疹ワクチンを受けるべき人は？

麻疹にかかったことがない、もしくは不明の方で、ワクチンの接種をしていない、もしくははっきりしない場合は、ワクチン接種が推奨されます。平成2年4月1日以前に生まれた方（現在26歳以上）は1回だけのワクチン接種が多く、その場合は2回目のワクチン接種について医師に相談してください。平成28年4月時点で40歳以上の人は、自然に免疫力を獲得している可能性が高くリスクは低いと考えられますが、妊娠を予定している人は医師に相談してください。過去に麻疹にかかったことが確実である人は、ワクチンを接種する必要がありません。現在のワクチンは卵アレルギーによるアレルギー反応の心配はほとんどないとされていますが、重度のアレルギーのある方は医師と十分にご相談ください。既に麻疹の抗体を保有している方に、ワクチンを接種したとしても副反応は増強しません。また重ねて記載させていただきますが、妊娠中もしくはその疑いのある方は接種できません。



2. 予防接種について

1回の麻疹ワクチンもしくは麻疹風疹混合ワクチンを接種した場合、95%以上の人が免疫を獲得できると考えられています。また2回目のワクチンを接種することで、1回では免疫ができなかった5%未満の人にも効果が期待できるだけでなく、免疫力の増強効果があります。（2回のワクチン定期接種を行っても、ごく一部の方に免疫ができない場合があります。）本邦における現行の予防接種法によれば、生後12か月から90か月未満を接種年齢としています。しかし速やかに免疫力を獲得するために生後12か月から15か月までにワクチンを接種することが望ましいとされています。母親から移行した免疫物質がワクチンの効果を不確実にするため、1歳以前にワクチン接種をする場合は、定期接種の扱いにはなりません。ワクチンの副反応としては、発熱や発疹がありますが、重篤なものには、脳炎がありますが、100万から150万人に1人の確率と考えられています。

国立感染症研究所のホームページでは、麻疹に関する教育ビデオがご覧になれます。ぜひ参考にしてください。

(<http://www.nih.go.jp/niid/ja/diseases/ma/measles/221-infectious-diseases/disease-based/ma/measles/570-measlesvideo.html>)

注：この麻疹に関する解説は以下の資料を参考にさせていただきました。

1. 医療機関での麻疹対応ガイドライン（第六版）国立感染症研究所感染症情報センター
2. 麻疹（はしか）に関するQ&A（平成24年4月21日改訂）厚生労働省
(<http://www.mhlw.go.jp/qa/kenkou/hashika/index.html>)
3. 国立感染症研究所 麻疹とは
(<http://www.nih.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/518-measles.html>)
4. 内科学 朝倉書店
5. 周産期医学 2014 vol.44 増刊号周産期感染症2014
6. 産科と婦人科 2016 vol83 「妊娠と感染症」

.